

国際文化交流の祭典推進会議幹事会（第2回）

平成30年10月22日

【事務局】

ただいまから第2回国際文化交流の祭典推進会議幹事会を開催させていただきます。

10月1日付けの文化庁組織改編に伴いまして、本幹事会に関する事務は新設されました文化経済・国際課が担当することとなりました。よろしくお願いいたします。

初めに、文化経済・国際課長の清水より、一言、御挨拶をさせていただきます。

【清水課長】 文化経済・国際課長をしております清水と申します。10月1日の文化庁の組織再編によりまして、10月より本会議も担当させていただくことになりました。

改めまして、この会議でございますけれども、祭典推進法の7条におきまして、国際文化交流の祭典の実施の推進に関する基本的な計画を策定することになってございまして、そのために有識者の方々から御意見を頂きながら、こうした計画作りを進めていきたいということでございます。

来年の3月、年度末をめどに計画を作っていこうと考えてございます。本日は有識者の方々にも御参加いただいております。どうぞよろしくお願いいたします。

【事務局】 それでは、議事に入る前に、本日の出席者を御紹介させていただきます。

まず、本日御説明いただきます有識者の皆様を御紹介させていただきます。

株式会社アートフロントギャラリー代表取締役会長、アートディレクターの北川フラム様です。

【北川氏】 北川です。よろしくお願いいたします。

【事務局】 香川県文化芸術局長、窪保彦様です。

【窪氏】 窪でございます。きょうはどうぞよろしくお願いいたします。

【事務局】 株式会社ライゾマティクス代表取締役、クリエイティブディレクターの齋藤精一様です。

【齋藤氏】 齋藤です。よろしくお願いいたします。

【事務局】 続きまして、本日御出席いただきました国際文化交流の祭典推進会議幹事会の構成員の皆様を御紹介いたします。

文化庁文化経済・国際課長の清水幹治です。

【清水課長】 よろしくお願ひします。

【事務局】 外務省大臣官房文化交流・海外広報課長の代理で、外務省大臣官房文化交流・海外広報課の垂井俊治首席事務官です。

【垂井首席事務官】 よろしくお願ひします。後ほど、課長の山谷が参ります。

【事務局】 続きまして、観光庁観光地域振興部観光資源課の英浩道課長です。

【英課長】 観光庁の英です。よろしくお願ひします。

【事務局】 経済産業省商務・サービスグループ、クールジャパン政策課、三牧純一郎課長です。

【三牧課長】 三牧です。よろしくお願ひします。

【事務局】 農林水産省食文化・市場開拓課長の代理で、二田紘太郎課長補佐です。

【倉員課長補佐】 済みません。本日、課長の西が出席できませんで、代わりに二田という者が来る予定だったんですが、二田も会議が長引いていて、代わりに私、倉員という者が参っております。どうぞよろしくお願ひします。

【事務局】 続きまして、事務局の出席者を紹介いたします。

外務省大臣官房文化交流・海外広報課の堀田主査です。

【堀田主査】 よろしくお願ひします。

【事務局】 最後に私、文化経済・国際課の専門官をしております袴田でございます。よろしくお願ひいたします。

続きまして、本日お配りしております資料を確認させていただきます。

資料1としまして、北川様の配布資料。資料2としまして窪様の配布資料。資料3としまして、齋藤様の配布資料でございます。

参考資料1から参考資料4については割愛させていただきます。不足等ございましたら、事務局までお申し付けください。

それでは、議題1に入らせていただきます。本日は3名の有識者の皆様から御発表いただきました後で、議題2としまして質疑応答に移りたいと思います。

それでは、まず北川様より30分程度で御発表をよろしくお願ひいたします。

【北川氏】 では、お話ししますが、僕のお話は恐らく全くこの趣旨から合わないと思いますが、せっかく呼んでいただいたので、僕のペースで話します。

まず、国際文化交流に関して、申し訳ないのは硬い言葉でちょっと理解しにくいし、しゃべりなれていないので、違う言い方になりますが、おととい、市原市の湖畔美術館で

ルトガルのジョゼ・デ・ギマランイスさんの展覧会が開会されました。このギマランイスさんはポルトガルから出て、兵隊としてアンゴラとかに行く。そこから帰ってきて、アーティストをやりながら、今、ポルトガルの国民作家になっている。ふるさとのギマランイス市にはそういう美術館ができている人なんです。その人の展覧会が谷川俊太郎さんの詩とかと一緒にオープンされました。そのオープニングのシンポジウムが真島一郎さんという外語大の先生をお呼びして、ギマランイスさんと僕が関わってやったわけですが、それは、アフリカとギマランイスさんは縁があると、何でそうやったかという、きょうの議題に関わりますが、僕にとってアフリカは非常に遠い国です。遠い地域です。中南米はアフリカより近くて、私たちはいろいろ関わりました。アフリカは極めて遠いところで、1984年ぐらいからアパルトヘイトの国際美術展を、世界の一線のアーティストたちが加わった190点余の作品をトレーラーに積んで国を回りました。国会でも代議士の先生たちがいろいろ発起人になって、憲政記念館で展覧会をやったというのがあります。

この日本のある場所でやる展覧会の中でアフリカを議題でやる意味が僕は重要だと思っています。つまりアフリカはいろいろな世代が、現在はラップとかあるいは小さな国の大きな音楽として。アメリカの巨大音楽産業にやられながらも独自のいろいろな動きをしているというところ。そこで最近出てきた重要な流れが話されたわけですが、それは「早く行くなら1人で行け。遠くへ行くならば、一緒に行け」という言葉に代表される雰囲気です。

私たちはというか、私はいろいろなギャラリーの展覧会あるいはいろいろな地域での芸術祭で可能な限りアーティスト、外国のアーティストたちをお願いして関わってもらいました。それは常にいろいろな地域で起きていることの想像力の中でやらなければ、一緒に行けないということだと思います。これは2つの面からいって、現在もまだ植民地主義の残りじゃなくてほとんど全面的な展開が行われている。もう1つはやっぱり今のIT産業というのは『ホモ・デウス』の新しい本とか、あるいは対照的でありながらほとんど同じことを言っている村田沙耶香さんの『コンビニ人間』にあるように、私たちは全くとんでもない方向に行っていると私は思っています。

そういう中で、文化あるいは文化交流というのは極めてフェイス・ツー・フェイスの中で起きてくるやり方である。きょうお話しする瀬戸内国際芸術祭でも、小豆島の800人の福田という集落で、7つの地域と国が、食とアートで関わっています。それぞれのいろいろな地域がいろいろなところとつながっていく以外に展望は僕はないと思っているわけです。

これは国がやろうとしていることではありますが、文化というのは国単位でやることは僕は基本的に無理だと思っています。ですからそのときに大規模祭典とか、そういったことは形として言わなきゃいけないかもしれないけれども、文化になじまないと思っています。

後で時間があつたら流しますが、もうどうしようもなくなった国連が、去年の暮れに持続可能な観光ということを行いました。これは恐らく、ネットでいろいろ流していますが、もう国連が第二次世界大戦の理念をほとんど失っているかに見える中で、それでもそこで頑張りたいという人たちがいっぱいいる。それは今までの名所旧跡に行くのではなくて、ほかの地域に行って、ほかの人と知り合えということだけです。つまりよその場所の違う生活を知れということだと思います。それしかもう平和への展望とか世界の共有の意味は持てないんじゃないかと。国連ももはやヒステリーを起こして、そういうことを言わざるを得ないと、職員たちが。という現況の中でそれ以上、危ないことは言いませんが、この国の中で文化交流をやるといのはどういうことか。僕にとって、アフリカの「早く行くなら1人で行け」と。「遠くへ行きたいなら、一緒に歩け」ということは、今、アートしかもうないのではないかと、動き出した飯館村とか、あるいは石巻の門脇小学校あるいは大川小学校の問題であり、いろいろなことをどたばたやったけれども、やっぱり共通の夢というか、共通の希望を何かアートというもので描けるのではないかと考えているということ。これが出発点です。

もうちょっと言いますと、去年の暮れ、文化芸術基本法が改正されて、その中で僕なりの観点でいえば、芸術祭がきょうの文化芸術を引っ張っている。その中で食というのが極めて重要になっているということが書かれていました。もうひっくり返るような革新的な言葉です。それを見ても、今、私たちは地域の中にいろいろな意味で地域の資源といったものを含みながら、なおかつよその人の手をかりながらやっていくということしかやるべきことがないのではないかと多くの人たちが思っています。だからさんざん批判された芸術祭がそれでも300を超える形で大中小やっているというのは、それなりに地域が需要を持っているからです。それがそういうところで、その地域というのは非常に偏屈な排他主義とかにならないために、常に、例えば飯館とか、あるいはアフリカで起きていることに意識を持ちながらやらないと、国際交流といのは何か僕はとんでもない方向に行くだろうと思います。

具体的に話す大地の芸術祭に関しては、簡単にいえば、新潟県の長野県と接する、人口3万人以上では世界で一番まとまって農業をやっているところで豪雪地帯である越後妻有と

いう、これはもう作り上げた名前です。それを、国際芸術祭で、そこで行われる3年に1度の国際芸術祭だと。これは美術の展覧会としてやっていません。2000年から継続して行われている地域創生の試みです。この約20年の間に、3回の激甚法に見舞われる地震を経験しています。2年に1回ぐらい、土砂崩れあるいは水に関わること、トンネルの崩壊がある非常に厳しい場所です。しかもこの地域は明治維新のときに日本で一番人口を抱えていながら、一番貧しい県の地域の一つであります。そういう中で農業をやってきた、明治以来、若年労働者を都市に送り、兵士になり、いろいろな形で頑張ってきたわけですが、この間のいろいろな流れの中で、効率の悪い農業はやめろと。効率の悪い地域に住むのはやめろという形で、それだけでも厳しいのに、夕張や何かであるように、日本はお金でひっぱたいた。お金をあげるからそうしろということです。私たちは、私利私欲で生きていますから、お金を出されたらもらわざるを得ない。喜んでなくてももらう。そのときに、全ての誇りを失わざるを得ないという形で、この地域はありました。もうとにかく東京中央に対して何周遅れかでものをやっている意識があった。そこにアーティストたちが入ってこの地域のいろいろなものを発見し、それを体感できるような作品に変えていきました。しかしこれは1回目、2回目ではうまくいっていない。非常に啓蒙的な、あるいは美術館なりギャラリーで行われているような作品が多く出てきました。だんだん変わってきます。そういったことが行われた。そんな中で始まっています。

これは共通するわけですが、国際展というのはあって、それぞれの地域では物すごく違います。しかし共通している。それはやっぱりこのそれぞれの場所がどういう地殻の上にあって、どういう土壌ができて、川とかそういった動きですね、褶曲。そこにどういう気候がかぶさっているかという中で行われ、それがもうベースになります。僕は文化芸術というのはいろいろな流行はあるけれども、基本的に人が生きているところでの生活、その表れだと思っています。

そんなわけととにかく豊かな水、世界有数の豪雪地であるというのは直感的に分かることであって、今から1500年前からそれまでの狩猟生活の流れがここにありますが、農業が現代も続いている。その次に明治以来、ここは山で谷川岳、苗場山で行き止まりになっていますから、とにかくそこからよそにつながるために、徹底的に土木をやってきました。これは近代です。現代になって、効率化あるいはグローバル経済といったことの中で、とにかく根切りをされているという状態です。これがこの地域の特徴です。これをいうならば、左下から見たいんですが、とにかく地殻があり、それが褶曲して地形が変

わり、そこに気候が関わっている。これは一番上の植生です。これは人間登場以前のもともある地域です。そこから5000年ぐらい前から縄文の人たちが河岸段丘で生活をし出す。そこに1700年前から稲作が入って、田畑ができ、集落ができ、土地利用がされている。一番右下がとにかくそれが約200あった今から20年前の集落ですが、これは相当やられてきて、集落単位ではなかなかいろいろなことができなくなった。そこに外国を含めていろいろなアーティストたちがその集落に入って、何を発見するかということをやろうとしている。これが芸術祭です。これはもともとが国・県の合併施策で行われました。効率が悪いから1か所でいろいろなことをやればいいというのに対して、この芸術祭は6市町村ではなくて、200の集落にこだわることを最初からやっています。つまりこの地域の文化的アイデンティティーは例えば十日町の旧松代町があり、そこに蓬平という集落がある。そうするとその人は大豪雪ですから、半年の間地域で助け合うしかないんです、豪雪の中で。ですから、集落に対して極めてリアリティがある、ほとんど命と等価です。新しい昭和の大合併の松代に対してはリアリティは薄い。まして新しく吸収合併された十日町に対して、リアリティはほとんど持っていません。それよりも昔あった越後というリアリティの方が多いという、やっぱりこれは単位というか行政単位も含めてすごく重要なことですが、これに関して参考にするべきはEUができたときに、EU、ECを経済性における統合は仕方がないけれども、ヨーロッパは、要するに中世を含めて城郭都市といったベースの中で出てきているんだと。だから地域のアイデンティティーはそういったリアリティのある地域の文化的な生活の蓄積でしかないということで、当時ギリシャの。ギリシャがないのはヨーロッパじゃないですよ。そのときの文化大臣であった「日曜はダメよ」のメリナ・メルクーリさんがやっぱり文化の統合は絶対あり得ないということを言って、今、EUではヨーロッパ文化首都というのがやりながら地域に焦点を当てているというのをやっています。この政策の中で合併施策でやりながら、この地域は200の地域にこだわるということをやっ続けて、現在もやっているということです。最初からあるのは人間は自然の一部であると。当時は共生とかいろいろな言葉がありましたが、冗談ではないと。やっぱり人間というのは自然の一部であり、自然とどうやっぱりそこに折り合いを付けながら生きていくかしかないだろうというのが、先ほど申し上げたいいろいろこの地域のベースをつかむ中で出てきたことです。この人間は自然に内包されるということが、今、福島あるいは三陸で私たちがこの地域に結構近しくやれている理由です。

簡単にいいますと、こういう作品がある。これは単純な窓ですが、これから切り取られ

た世界。これは一番有名な作品ですが、50メートルぐらい向こうに猫の額ほどの棚田が7段あって、右下から順番に田起こしから始まって一番左の米を町に運ぶということ。手前に3メートル、2メートルのフレームがあって、そこで字が掛けられているいわば立体絵本のように遠くが見えるというようなことです。つまりこれが相当難航しました。福島さんという人は、もう2000年に辞めるとは言いながら、よく分からない現代美術家、しかも外国の人ということでいい顔をしなかったんですが、アーティストをはじめサポーターが一生懸命勉強し、学び、そういう中で、ここの雪国で農業をやるということ。これはカバコフの発見ですね。それをここに創ろうという形でやりました。その過程の中でこの人たちが協力し出した。3番目が協働です。アートはほかのものと違って人を呼び込む力が極めてあります。やっぱりアートというのは具体的な作品を見るという行為とは全くほぼ違う。体験です。僕のをみてください。つまり、僕もここに入るまで、つまり瀬戸内をやるまでは、このものが何か力を持っていると思っていました。それは今も同じです。しかし例えば今年の終わったばかりの芸術祭の2,000人のサポーターのうちの1,000人は外国人のサポーターです。要するに労働量としては日本人よりずっとやっている。そういう人たち、つまりアートという非常に面倒くさい、お金の掛かる、言うことの聞かないもの。直接的に何も役に立たないものだからこそ、いろいろな人たちが、これ赤ちゃんのように隣のおじいちゃん、向かいのおばちゃんたちが手伝ってくれる。アートが今、これだけ多くの人たちが動き出している。日本全体はいわゆるファインアートの市場としては今、壊滅しています。しかし日本の地域芸術祭が今、世界にそれなりの発信力を持っているのは、アートを守り、創っていく、人に伝えようとしていく中で起きているいろいろなこと。そこにいろいろな要素が入ってきて、元気があるということだと思っんです。ここが極めて、重要なことだと思っています。

これからさっと思ますが、これは言ってみれば他者の土地にものを造ることです。アーティストは場所を発見します、すばらしさを。だけれども、ここにやろうとしたら、私有地ですね。そのアーティストのいわば妄想を土地の人たちがそこでやっていいという中、このプロセスの中で、いろいろな意味での排他性がなくなっていったら、いってみれば何か共通的なものができていく。この他者の土地に造るということがもうどれだけ大きな影響を与えたかということは重要なことです。守られた広場ではやっていません。これは瀬戸芸もほとんど同じです。もう人の家にまで入ってやっているということです。

そういう中で、普通ではマイナスの場所で多くの廃校、空き家が出ていく。これはマリ

ーナ・アブラモヴィッチという超スーパースターですが、古い家を使ってここから板橋区に出ていったおばあちゃんがいつでも帰れるようにこれをやってくれました。しかもこれは一鳥四石です。マリーナ・アブラモヴィッチの作品をいつでも見れる。村山さんのおばあちゃんはいつでもここにお金が掛からないで来れる。地元が安いとはいえ、ケータリングサービスをお願いし、あるいは管理のお金を払っている。一番すごいのはこれがあることによって、いろいろな人たちがこの集落とつながり出したということです。あるものを生かし、新しい価値を創っています。田舎のじいちゃん、ばあちゃんは本当に歩けない人以外は働いています。人手がない。そういう中でいろいろな人たちが関わりました。第1回目から芸術祭を支えるものとしてのサポーターはすごく重要な形です。妻有ではこへび、瀬戸内ではこえびといいます。こえびはもう8,000人を超えるエントリーがあって、かなりの人たちが関わろうとしているわけです。この動きは日本の中で徹底的な動きになっていくんじゃないかと思っています。これも作品そのものじゃなくて、それを支えるための動きが何かを創り出したということです。

これは2004年の中越大地震に一番近いところの家。この家は人がいなくなった。でもこれは6軒しかいない集落なので、ドミノ倒しになる。これを、国交省の人はよく知っている大先生、田中文男大棟梁が指揮をして、筑波大の安藤邦廣さんが設計をして、日本を代表する陶芸家の人たちがいろいろなことを創る。ここでやったことは地元の食材。地元のお母さんたちの料理、そういったもので古い家を作るということです。これは今も大体変わりませんが、50日間で1,400万の売り上げが、全部地元のものです。プロが手伝っているということです。日芸の彫刻が頑張った脱皮する家は一番古い家でしたが、天井からはりから全部彫ることによって、生き返ったというものです。

これも廃校です。ボルタンスキーという人が全部地元の材料を使って何か世界を創った。これは3年前の日経新聞で廃校利用、人気日本一と言われた絵本と木の実の美術館。ここからいなくなった3人の子供たち。最後に隣の学校に移った子供たちを主人公にして、これもいわば立体絵本です。この学校をよみがえらせた。

この作品の中身は別にして、海外によるすごい名作だと思っていますが、タイのラワンチャイクンの作品です。タイの自分のお父さんのお店の問題とこの地域で一番古い40人ぐらいしか住んでいない赤倉という集落とかが二重写しになる。最初はラファエロのアテナイの学堂をモデルにしようと思っていたんですが、変わっていきます。ここで本題からずれますが、僕はここの地域のお年寄りが彼岸に近い、あるいは集落が少しずつ減っていく。

お墓を守る人がいない。郡部の人たちの二、三割は次に自分の子弟がここに来るのは自分の葬儀のときだろうと思っている。都市に行ったからといってみんなうまくいっていません。そう思っています。これは机上で分かってきたことですが、つまり瀬戸内に入って全く違うことが分かってきました。つまりここのお年寄りたちは自分が好きな特技を發揮したいんです、最後まで。棚上げされることがうれしいわけではない。そこでとにかく自分しか分からない山野草がある場所に行って、落っこったりしていますが、そういうようなことを含めて、これが地域です。この地域のお年寄りたちが集まる瀬戸内では相当表に出てきています。それとよそから来る若い人たちがつながっているわけです。それが芸術祭を大きく支えているということになります。

そういう中で、今年は香港ハウスが登場しました。香港から400人の人がオープニングに参加する。何で中国国内ほかでやらないのといったら、自分たち、今、生きている人は全部この100年ですから、英語の世界の文化の中で生きてきたと。それをやっぱり日本でちゃんと残したいということで頑張っているわけです。香港4大学は全部共通でやって、事業にも相当大きく中心の事業としてやっています。アンブレラレボリューションのときのリーダーの何人かはこの大地の芸術祭に関わって農業ということに目覚めた人たちでした。香港はこういう活動を同時にやっています。

中国は、これは民間ではありますが、政府がいろいろ応援している。空き家を使っている。いろいろ日中の話をしています。ちなみに今年、大地の芸術祭は50を超える省、市、県、郷の中国からの視察がありました。それはすさまじい形です。その人たちは中国の今、都市と農村の格差を解消するためのモデルとして、芸術祭から学ぼうということはかなり意識的に来ています。これは大変な流れになっています。

中国での記者発表は、大地の芸術祭は終わりましたが、瀬戸芸も今年12月にやります。韓国は屋外でこういう美術展をやっている。この芸術祭の面白さは今、いろいろなことが、俺が俺が、あるいは自分だけがよければじゃなくなってきました。サポーターの影響が物すごく大きいと思います。サポーターはいろいろなところを手伝いにいきます。外国も含めてです。その人たちが手伝うことによって、今、ここで書いているのは少なくとも来年の芸術祭が全部連結しています。みんなで助け合おうと、人を回そうという動きになって、これは今までの日本のいろいろな中では珍しいことが起き始めています。

そういう中で今始まったことは、都市のいいところ、悪いところ、弱点。田舎のいいところ、悪いところの交換をしようということです。これは分かりやすいのは津南にある廃

校です。地震でやられました。これは東京芸術劇場のシアターイースト、ウエストとほぼ同じ大きさ。これを利用しながら、劇場としてのレジデンシャルをやっていて、彼らもここでゲネプロをやって、本番を東京でやるとか、そういう形で加わっています。これは結構、いろいろ動き出している。

あるいはこれも廃校ですが、奴奈川キャンパスでは、主要5教科以外の序列でいうと家庭科、スポーツ、音楽、美術といったものを行っています。そんな中で、女子サッカーチームも田舎に出てくる。これは分かりやすく言うと、スポーツは柔道以外はほとんど中高と頑張ってきて、潰しが利かない。25歳以上になるとほとんど関わられません。それに対して、これは為末さんとかも結構協力してやっていますが、要するにずっと趣味、あるいは一生懸命やったことをやれる場を創っていかないといけないということがこの場合の女子サッカーですが、地域としては農業のなり手が無い。お嫁さんがいないということの中で大歓迎で女子サッカーチーム、恐らく来年活躍し出しますが、そういうものを行っている。そして、都市のいろいろな人たちがこういう形で関わっている。

1回目をやってくる中で、アンケートを見れば分かりやすいんですが、この越後妻有の場合は、里山だ、あるいは世界で有数の現代美術展だということが来られる人の動機です。瀬戸芸の場合もほぼ同じで、海を渡る、あるいは島という魅力がなっているわけですが、帰るときの意見はかなり違う。もちろんそれぞれ、島とか芸術祭、現代美術のよさと言っていますが、大きくいうと、地元の人と話せた、あるいはいろいろな人たちとここで出会えるプラットフォーム化してきたわけです。地元の食を食べれた。場合によっては田舎の祭りに参加できたということです。つまりいろいろなアートその他というのは、例えば香川県でも新潟県でも地元のアーティストが、仮にランクを付けると世界のトップではないですね。そんないるわけがない。しかし、食に関してはその場で、先ほどあったように、地の材料で地元のお母さんたちの料理。これはいろいろな人たちが手伝いますが、それをそこで食べる限りにおいて世界一です、間違いなく。食の割合はぐんぐん多くなってきています。でもこれは本当にみんなすごいわけです。これはもう大変な人気です。

例えば先ほどの劇場を入れた上郷のクローブ座というのは、とにかく予約制で、1コース以外は注文受けてなんか作れません。そういう中でお母さんがサービスをお芝居的にやっているというふうなことで大人気です。そんなことです。

ちょっとここで知ったかぶって物を言いますが、僕の方を見てください。今までこれが作品だとすれば、これがヨハネスブルグでも東京でもニューヨークでも同じように見える

ために、高い白い壁のギャラリー、美術館でやってきました。これは20世紀の均質思想あるいは民主的な思想の似合う感覚です。僕はそれが悪いと言っているわけではない。しかし、ここでやっていく飛躍の幅というもの、これはすごいことで、これを評価する余り、今アートというのは最高の金融商品に成り下がってしまいました。ここでの飛躍だけがいい、いいと言われている。ところが、やっぱりアルタミラ、ラスコー以来、アートというのは自然とあるいは文明と人間の関わりを徹底的に示してきたものです。このアーティストたちも、これは僕、批判ではないんですよ、これはこれで重要だけれども、この人たちが地域に出たがっています。自分がここでやろうとしてきたことが、やっぱり本当に大変な、ここでいえば田舎、あるいは瀬戸内でいえば過疎の島に対してどう利くだろうかとみんなやりたがっている。この大地の芸術祭、あるいは瀬戸芸がすごく面白くなっているのは、いいアーティストたちが展覧会場だけではなくて、現場の大変な場所に自分たちが出ていっているからなんです。この観点が極めて重要です。そんなことを図化したものですが、ちょっと早く終わらせますね。

これは芸術祭をやっている、この辺に関しては私たちはプロじゃない。本当にいろいろなプロが関わってほしいと思っています。例えばすごい人たちがこの20年間の中で関わり出したということがあります。例えば三陸の方で、農の祭典とか食の祭典をやっているITの企業家たち、社長たちが、ほとんど大地の芸術祭の助っ人に入り出しました。そういうことを含めて今、この辺にはいろいろな人たちが関わっているといえます。

これが国連がやった開発のための持続可能な観光の国際年のことですが、時間がないのでやめて、瀬戸芸のことを簡単に話します。

窪さんが効果についてお話しされますので、もともとは7つの島でやっていた。例えばある島にいる人たちは高校がありませんから、子供が中学になっているまでは頑張るけれども、やっぱり高校のときにぎりぎり島に生きていた人がやっぱり宇野とか高松に行くわけです。人口の減り方は中途半端じゃありません。そういう中でそこでもアート建築をきっかけにやっていくんですが、狙いは地域に流れてきた時間です。あるいは住民の生活です。そうしてこれをやっていくために最初から、妻有でも瀬戸芸でも抱えている問題を見据えて日本全国世界各地の人が関わる芸術祭をやろうと。普遍的でなければ誰も面白くないよ。普遍的でなければ自分たちの独りよがりじゃないか。アジアフォーラムとかいろいろなシンポジウムをやっていますが、可能な限り、世界の英知が集まるように、本当にすごい人たちが関わってシンポジウムをやっています。そして、それを、5番目ですが、若者たちと

一緒にやる。重要なのがこの6番目です。瀬戸芸で3年間、1,100日のうちの100日です。妻有は1,100日のうちの50日です。お祭りです。大切なのはその芸術祭以外の残り1,000日をどう関わるかということです。瀬戸内では恐らく数十人の人が今この瞬間でも動いているはずで、島で。道普請に加わるとか、運動会に出るとかそういうことを含めながらやっている。この芸術祭ってお祭りというのは、もともと日本のお祭りにあるように生きていくのはいろいろ大変だと、ここの場合は3年に1回、みんなではしゃぐ。楽しくやるということです。それ以外の生活の部分で関わりがなくて、お祭りなんかできるわけがない。それは形だけの何かです。それをちゃんとどうやるかです。

ここからは作品はあれですが、もう窪さんにバトンタッチします。これは人口が減っていたよという話で。もう1つだけじゃあ言いましょうか。これは安藤忠雄さんの地中美術館という大人気ですが、建物の形はない。ここでやっているのは、安藤さんはこの瀬戸内の美しい空と海を内部に輸送する仕組みとしての建築、機能としての建築をやっているわけです。こういったことがいろいろあるということです。

豊島は緑豊かな島です、もともとは。壇山という山に水がたたえられている。今、私たちは農業の復活をやっています。そこにできた高さのない美術館ですが、世界でも有数の大人気美術館です。ここにはいわゆる彫刻、絵画は何もありません。地下から浮いてくる水滴が時々流れて重なって水たまりができる。それだけです。しかしこれの大人気はすごいものです。やっぱりこの地域を表しているわけです。

そんなところでやめて、窪さん、お願いします。

【窪氏】 香川県の窪でございます。

引き続き、瀬戸内国際芸術祭につきまして、私からは「瀬戸内国際芸術祭の取組みが地域にもたらしたもの」というタイトルで、行政としてまとめさせていただいたものを御紹介したいと思っております。

私の説明は配布資料でいいますと、6ページから紹介したいと思います。瀬戸内芸術祭がいろいろ地域にもたらしたものとして、まずは地域が元気になった、島が元気になったと言われておりますけれども、それはどういうことかというところ、こういうアンケート調査ですとか、住民主導の自主的な取組が表れてきたというところがございまして。また、会場となる島が12あるわけですが、その中で数字の上で成果が表れてきている島が男木島があるかと思っております。これは高松港沖の周囲5キロの小さな島です。高松港からフェリーで40分ぐらいのところですが、瀬戸内国際芸術祭が始まって以降、160人ぐらいの人口

の島に移住者が24世帯49人今までの実績として来られているということでございます。高齢化率もずっともう最大67%ぐらいまで上がっておりましたけれども、これは香川県の平均で30ですから、その倍以上ということです。香川県自体全国平均よりも先を行っているわけですが、その中でも高いのが最近、60%を切るぐらいになってきたという状況です。子供さんがいなくなって休校していた小中学校が、2014年度から再開いたしました。驚くべきことはその再開後、今年度、児童・生徒が増えているということです。校舎も実は学校を再開してみると、耐震がないということで、高松市の方で数億の予算を付けて、新築をされました。それほど議会も学校、閉校、休校にはしないぞという決意の表れではないかと思っております。こういった若い移住者の方々が協力して島の活性化に取り組む連鎖ができております。これは移住者の中に単に住むというかそこで1人で活動するというよりも、瀬戸芸と連動して島の活性化に取り組む方が多かったということが挙げられるかと思えます。

それから、次に豊島の島キッチンの例を御紹介したいと思います。豊島で島の集落の古い民家を利用して、瀬戸芸の作品としてレストランとして運営しております。ここがどういう機能を持っているかという、来場者については食事をする場所、又はいろいろな人との出会いがあつて、情報収集ができる場所ですけれども、島の人たちの目から見れば、雇用の場であり、また漁業者、農業者の方からすれば自分たちの生産したものを販売する先になっています。それから、その島キッチンでお弁当を作って、島の高齢者に販売をしたり、家庭訪問をして見守りという機能も果たしているという状況もございます。こういったふうに考えてみますと、瀬戸芸の取組がいわゆる社会解決型のビジネス、ソーシャルビジネスになってきているのではないかと捉えております。行政が初期投資をして、そういう古い民家を改修してアート作品にしたと。瀬戸芸の中でPRしてやる。ボランティアさんが運営をサポートする中で、持続性のあるビジネスとして定着している例でございます。こういったものをほかの島でもどんどん造っていければと考えているところでございます。

次に、経済波及効果でございます。行政的にはやはり事業をやっていくときに、瀬戸芸でいいますとチケット収入だけで全体の経費を賄えないわけですから、なぜこの事業をやるのかということを議会に説明する必要がございます。そういった中で一番数字で表しやすいのが経済波及効果なんですけれども、2016年の芸術祭の経済波及効果を日銀の高松支店で試算していただきましたところ、139億円という数字が出てございます。この数字は、

あくまでここにありますがように香川県内への経済波及効果でありまして、例えば海外、県外からたくさん来られていますけれども、あくまで香川県に入ってから消費額ということですから、いってみれば国外から日本に来て、また瀬戸芸を見た後、いろいろほかに流れていったときの経済波及効果まで考えますと、これは大きな数字になるのではないかなと思っております。ここで、特徴はやはり県外から来て宿泊される方は1人当たりの消費額が高いということで、これが海外の方が伸びておりますので、経済波及効果の数字を押し上げる要因になってございました。

インバウンドも増加しました。いろいろな指標で全国1位という数字を頂きまして、我々の自信にもつながっております。外国人延べ宿泊者数の状況をまとめております。それから観光白書で記載されましたけれども、香川県が過去5年間の伸びでトップになっております。それから高松空港の航空ネットワーク。それから高松空港利用者数の推移。これも5年連続過去最高を更新しましたが、ちょっとここで御紹介したいのは、中ほどにあります下線を引いておるんですけれども、台湾との直航便です。台湾との航空路線の就航はもう悲願でありましたけれども、これが就航しましたのが、瀬戸芸の2013の開幕の日で、開幕の日の翌日に初便が飛びました。これは日が変わったのは、週4便の曜日の関係で翌日になっているわけですが、瀬戸芸がきっかけで就航して、次の2016のときに、週4便から週6便に増便になりました。来年の19年の瀬戸芸のときには、是非デイリーをとということで、今、知事もトップセールスを行っているところです。

最近の新聞ですが、香川県のホテル建設ラッシュと報じられております。2016の瀬戸芸以降に高松市中心部で5棟、594室の供給がありました。都会から見ますと大した数字ではないんですが、もともと高松市中心部の定員でいいますと、2016の頃に6,000ぐらいと言われておりましたので、600室というのは定員でいうと1.5倍ぐらいになると思いますから相当な増え方をしておるということです。

このような瀬戸内国際芸術祭ですが、実行委員会の収支についてちょっと御紹介したいと思います。3年ごとにやっておりますから、これは3年間の収支でございますが、下にありますように、大体12億が実行委員会の事業規模でございます。実行委員会は香川県と10の市町と福武財団が中心になって、まず負担金を3分の1ずつ拠出して、それが2億、2億、2億の6億、あとチケット収入ですとか国の助成金など、あと企業の寄附、協賛金などで賄っております。12億に対しまして、収入が13億9,000万という結果になりましたが、この剰余金につきましては、翌年以降の作品の公開やメンテナンスあるいは次、来年の芸術祭の経

費に充当することとしております。ここで申し上げたいのは、香川県にすれば実行委員会の拠出は2億なわけですが、これをほかの市町や民間と組むことによって、事業規模を12億まで大きな事業にすることができていると。さらにこれがこの経済波及効果が139億円を生み出しているということは、つまりこの事業の必要性を地元で説明していく上で大きな材料になっております。

今後に向けての課題でございますが、やっぱり島の皆さんも高齢化していく中で、人材が鍵かなと思っておりまして、北川先生の下で瀬戸内フラム塾という人材養成塾を開講しています。今回、申し込みが67名ございまして、海外からも応募があった状況です。

それからアジア諸国との交流促進ですけれども、これは前回の例を書いておりますが、瀬戸内アジアフォーラムをやりました。これは瀬戸芸に対しての問い合わせ、指導要請などが海外からもたくさんある中で、北川先生もやってみようということでおっしゃってくださいましたので、香川県瀬戸内地域の求心力のアップのためにも役立つんじゃないかということで取り組んだわけでございます。来年の芸術祭についても継続して取り組みたいと思っております。

あと、海外への情報発信、ツーリスト対応も取り組んでまいります。あと来年の芸術祭ですけれども、いよいよあと半年になりました。是非、来年も皆さんにお越しいただければと考えております。どうぞよろしく願いいたします。

【事務局】 ありがとうございます。

続きまして、齋藤様、よろしく願いいたします。

【齋藤氏】 ライゾマティクスの齋藤です。

実は北川先生とは2003年の越後妻有トリエンナーレにホワイトベースという、ライゾマティクスを創る4年前に参加させていただいていて、これは十日町の国道117号を3キロも止めていただいて、そこで光る風船に、風船の中にヘリウムが入っていて、その中に電球が入っていて、それがふわふわ浮くというものを創らせていただいたんですが、きょうお話しするのは、メディア芸術の分野でお話をさせていただきますが、メディア芸術というと、何かコンピューターを使って、若しくはいろいろなテクノロジーを使って組み合わせて何か作品を創るというのがありますが、今から考えて、よく僕、講演会でもこれを使わせていただいているんですけれども、光るもの、若しくはいろいろな意味でメディアというかテクノロジーが使われているわけで、ここで僕はすごく学んだのが、もう既にお話しされましたが、やっぱり地域性。実際に灯籠流し。これはGINGAというタイトルでやらせていた

だいたんですけれども、ここが諏訪大社の分社がありまして、着物の神様が祭られているというので、その文脈にのっとなって、皆さん、浴衣で出ていただいて、地元のお酒の越州というのを振る舞い酒しながら、灯籠流し的にやった作品でございます。

その頃から見ると、ちょっと今の日本メディア表現系のイベントの現状をまずお話をさせていただくと、文化庁さんだと文化庁メディア芸術祭をやられていたり、あとは美術館でいうと山口の情報芸術センター、YCAMとか、あとは老舗でいうとICC、初台にありますNTTさんがやられているインター・コミュニケーション・センター。あとMiraikanさんとかいろいろありますが、TodaysArtとかMedia Ambition TokyoとかMeCAとかArt Hack DayとかMUTEKとかいろいろなイベントが乱立しているんですが、実は横串で全く刺していないと。私自身も以前、Media Ambition Tokyoを立ち上げたのですがこれをやった理由というのが、メディア芸術祭が以前、2月にやったと思うんですけれども、展覧会も。その裏番組でせっかくメディア芸術祭をやっているのであれば、音楽も表現も何だったら人も集まって、そこで交流してというのもできないかという裏番組的に創ったんですけれども、実はメディア芸術祭がまた移動して、これは2月に残ったんですけれども、という何かメディア芸術とかメディア表現系のやつだとなかなか1つにまとまっていない感じがあります。

当初、ライゾマティクスを立てたのが2006年できょうは余りライゾマの話は余りしませんが、2006年に立てたときだと、ほとんど我々は国からのサポートも、ほかの民間企業さんからのサポートもなしで、自分たちで自立してやろうというのでずっと自走式にやってきました。当時はメディア表現自体、日本の中でも余り大きくない時代だったと思います。メディアアートのコンテクスト自体がちょっと日本の中で切れたような感じがあったんですが、今考えるとその頃、僕なんか自走式でももちろん作品は創りながら、これがパフォーマンスアートもあり、もちろん美術館の中でやるようなものもあったんですが、ちょっと言い方はあれですけれども、そんなものでお金がもうかるわけがなく、二足のわらじでずっとやっていたのが広告とか企業イベントでした。

結果として、メディア表現というのは今、現状、いろいろな企業さんとか若しくは個人の方が動いてそういう潮流になったと思うんですけれども、美術館だけではなくて、広告、ゲーム、企業イベントとかライブ、様々な分野で当たり前になったと。僕が思っているのが、現代美術と前まではメディア表現とメディアアートのところは結構明確な境界線を引かれていたところがあって、以前は例えばアートフェアとかでメディアアートなんか売れるわけもなく、あとは芸術祭とかでも余り呼ばれるようなアーティストがいなかったよう

に感じています。ただ、最近、フラム先生がやられている瀬戸内もそうですし、越後妻もそうですし、そのほかのトリエンナーレとかでもビエンナーレとかでも呼ばれるようになってきたと。僕が思っているのが、先ほど挙げました美術館もそうですし、若しくはMiraikanのような一部行政がやっているような場所であるとか、あとは民間がやっているイベント、もうばらばらなので、それはそれでいいのかもしれないですが、もうそろそろ誰かが号令を掛けて、ちょっとお互いに高め合うような、例えば時期を決めてみるとかそういうことが必要なのかなと思っています。

現在私が関わっているプロジェクトは多岐に渡っており、メディア開発もやっていますし、もちろん広告もやっていますし、企業R&Dみたいなこととか、あとは製品開発もやっていますし、あと文化系、今だとドバイ万博とかもやらせていただいていますし、あとは災害復興。今、ちょうど今週末、おおい大茶会の中の関連イベントで大分の日田市で復興イベントをやらせていただくんですが、そういうこともやらせていただいております。

何を言いたいかというと、メディア芸術、メディア表現の方。芸術ではなくて表現を扱っている会社は比較的自走式になってきたと。要はいろいろな業務に携われるようになってきたというのがイメージとしてあります。

海外で行われていること。これは海外が優れているというよりは、日本とは全く違うことをやられていて、例えばアルスエレクトロニカ。これはオーストリアのリンツにあるメディアセンターですが、こういう建物をしてはいますが、さっきフラム先生がおっしゃったみたいに、ヨーロッパの中で、都市を決めてもう大量投下して美術館、メディアセンターを造っていくというので、造られた場所だと聞いております。日本でいうと、山口情報芸術センターやICCがメディアアートの聖地みたいのところになっていますけれども、ヨーロッパでいうと、若しくは世界でいうと、比較的アルスエレクトロニカセンターはメディア芸術の中心になった場所でございます。ここでやられているのが、アルスエレクトロニカが主催するアワードやフェスティバル、あとはEUの表現系のものを表彰する仕組み、最近だとスタートアップとかそういうデザインも含めた賞。これはSTARTS PRIZEといいます。そういうものをやられていたり、アルスエレクトロニカセンターには、フューチャーラボといって、例えばメルセデスさんとか、以前、ホンダさんのASIMOとかもここにいて、共同でアーティストと企業が一緒に共同開発するようなこともやられていました。そういう場所です。もう1つ大きいのが、ソナーという、これもバルセロナ、スペインでやられているイベントですが、これは比較的ライブイベントで知られていますけれども、ライブだ

けではなくて、展示もありますし大きなカンファレンスもずっとあると。なので、個人的には先ほどのアルスエレクトロニカよりはもう少しライブエンターテイメント色が強いと感じますが、日本も含めて世界中から今年も6月に行われましたけれども、人が集まるといイベントになっています。

じゃあこういうものが日本にあるかという、大きな器がまだ出来てないにもかかわらず、大学ではメディア表現学科とかそういうものが乱立していて、彼らは一体どこに就職しているんだろうと個人的に思っていたんですけども、結局、広告代理店であるとか、それを制作するような会社さんに行っているんですが、メディア表現に関わる開発アーティスト、教育機関などが増えているんですけども、それが全体的に日本発信の文化として押し上げているかというところが僕は結構疑問でございます。メディア表現、傘で考えると、音楽も入る、もちろんアートも入る、映像とかグラフィック、パフォーマンスアートとかSTEAM教育、広告、製品開発とかトークセッションみたいなもの、あと研究とかファッションとかそういうものも入って、今までは比較的メディアアートだとうちもやらせていただいているライブとか美術館の中でも一部の美術館でやられるような実験的なものとかが多かったですけれども、最近はメディア表現というのは比較的広い意味で取られることが多くなってきました。

僕なんか、じゃあそれで商業の方に行ったかという、商業の方に行った人もたくさんいるんですけども、我々ライゾマティクスとしてはそこだけではなく、じゃあメディア表現でできることをどういうことであるかをずっと考えていて、しっかりとしたアートの文脈も踏みながらやっていくということで、最近多くなってきたのが、地方創生。場所性が求められるようなことです。あとは都市開発とか、それも同じくじゃあ国家戦略特区の中で新しい広場を造ってどういう表現ができるかとか、あとはアートフェスティバル。これはちょっとアートフェスティバルと一言で言うとあれですけども、先ほど言った大分の日田であるとか、ほかでもいろいろやらせていただいているんですが、その場所だからこそ表現できることというのは何なのかということ結構多くやらせていただいています。

なので、比較的メディア表現だと、何か東京で生まれたものをぽって持って行って、それをどこかでやれば集客ができるだろうと。しかも例えば今、他社さんですけども、コンテンツによってはオープンしてから50万人とかおっしゃっているんで、それだけの集客性があると。そういう意味で使われていることが多いんですが、今回、御検討されてい

る国際的な大きなイベントをやるのであれば、しっかりとアートのコンテキストも持ってやるべきではないのかなと思っています。

メディア表現の中で、分野というか業界の中で、僕が思っているのが、先ほど言いましたそれぞれ違う小さいアートフェスというか、メディアアート系のイベントをやりますが、個々の発信力が弱過ぎて、あとは財源がなさ過ぎて、皆さん小さく終わるんです。それを前々からもう1つの問題としてプロデューサーが全然いないというのがあって、じゃあこの場所を押さえてくる人、若しくは財源を確保してくる人、アーティストを説得してしっかり事務局を立ててそれを回せる人というのが我々のメディア表現の業界だとほとんどいないので、そういう人たちもしっかり作っていかなくちゃいけないと。あとはもう2000年ぐらいから続いたのであれば、20年弱それがずっと来ていると思うんですけども、もうそろそろそれをまとめていく必要があるのかなと思っています。それをまとめることで、海外にも認知できるのかなと思っています。

あともう1つ、質問で言ったけれども、2020年に向けてというので、僕が思っているのが、2020年オリンピック・パラリンピックは絶対によい機会になると。特に文化オリンピックアード。これは個人的に思っているのは文化オリンピックアードはちょっと東京オリンピックは薄いかなと思っているところがあるんですけども、全国同時で何かをやるのかということというのは、比較的、個人の力、若しくは一民間企業の力ではできないので、例えば今回の仕組みを使って、文化庁さんの呼び掛けで1つになるきっかけみたいなことができないかなと思っています。

あともう1つ、先ほど言いましたとおり、比較的ばらばらに行われているので、夏に行く人もいるし、2月に行く人もいるし、あとは震災復興、災害復興とかでいうと、別に定期的に、例えば年末であるとかにやらせていただいているので、カレンダーを1個作るべきかなと思っていて、これは既に芸術祭とかであればやられていることかもしれないですけども、よく海外のプレスの方に聞かれるのが、何月に日本に行ったら何が見れるか。それって満開の桜が見れるだけではなくて、じゃあデザイン展っていつやっているのか。デザイナーズウィークとか。デザインウィークっていつやられているのかとか、ミラノサローネみたいなああいう祭典はいつやられているのかと聞かれることが多いんですけども、特にメディア系のものだとカレンダーがないので、そこにそれをちゃんとと言えるようなカレンダーの仕組みが必要なかなと思っています。

もう1つ、これは追加させていただいたんですけども、表現の場の整理というのは屋内

空間だけではなく屋外空間も表現の場となるというのは、この前も新宿御苑で夜歩きというものをやらせていただいて、あれは環境省さんの管轄なので、夜間活用ということでやらせていただいたんですけれども、制作的な視点から考えると全然クオリティが出なかったです。我々の求めるクオリティが出なくて、結局いろいろなところで調整いただいて、内閣官房からも御支援を頂いて実施できたんですが、やっぱり我々表現者としては、できるだけ自分たちの納得いくクオリティを出したいんですけれども、設営時間が極端に少ない等とか、そういうので結局できなかつたんです。その環境整備のためにいろいろな人が、それこそいろいろな市町村さん若しくは首長さんが動いていただいて、場所の整備とか若しくは特例措置として、この場所を使っていいよとか、若しくは国道を止めていただくみたいなことをやっているんですけれども、どうしてもメディア表現という大きいものを扱いたいアーティストの方も多いので、そういう意味では様々な整備が必要だと。今、その整備をやるような、先ほど言いましたがプロデューサーが余りいないので、結局我々の場合は、僕とかうちのプロデューサー陣が実際動いて、実際に行政の理解の深い方とお話ししながらそこら辺を進めているところが現状なので、そういう整備もあるといいのかなと思いました。

ちょっといろいろなところに話が飛びましたが、私からの話は以上でございます。ありがとうございます。

【事務局】 ありがとうございます。

それでは、有識者の皆様からの御発表を踏まえまして、幹事会から質問や御意見がありましたらよろしくお願いたします。

【清水課長】 ありがとうございます。今、御紹介いただきました。やっぱり地域性であるとか、現場に根差してということが一つやっぱり鍵だろうと思います。我々のこの枠組みは法律で国が旗を振ってということに一応なっております、やっぱり公共のサポートという点でいいますと、先ほど県の取組という形でのサポートがいろいろありましたけれども、国が直接というよりは、より現場に根差したところでのサポートであったりとか、アレンジであったりとか、そうしたことがやっぱり望ましいというか、まずあるべき姿だということでしょうか。

【窪氏】 瀬戸内国際芸術祭の取組もここで実行委員会を立ち上げてから10年になってございますが、最初から順風満帆だったとは聞いておりませんで、やっぱり本当にこれどうまくいくのかとか、地元でも反発とか懐疑的な目がある中で、北川ディレクターが直接

島を回っていろいろな話をするうちに、地元の皆さんもそれならということでだんだん乗ってきて、それが今に至るという状況かなと思います。だからこそ、これだけの住民の方々が自分たちの芸術祭と思って盛り上がるという状況が生まれているのかと思いますけれども、やっぱりそれにも長い期間が掛かったんだろうと思いますし、その辺り、すぐ来年やってどうのというよりは、長い目で支援をしていただければありがたいと思っておるところです。特に瀬戸芸につきましても、いろいろ成果の一端も御紹介しましたが、瀬戸芸もまだまだこれからと思っておまして、成果が出てきているのも一部の島であったりしますし、また地元の方の取組もやっと芽が出てきたと。これを育てていかなければと考えているところですので、引き続きいろいろ御支援をお願いできたらと思っております。

【山谷課長】 外務省文化交流・海外広報課長、山谷と申します。本日、遅れて参りまして、大変申し訳ございませんでした。1点質問させていただきます。

この国際的な芸術祭を行うことで、例えば、インバウンド観光や、地方の海外への発信の一助になるという側面もありますが、国内で開催する芸術祭が海外のアーティストの作用の場になって、文化的な側面で直接裨益するという面はどの程度あるのでしょうか。経済的な側面はよく語られており、本日の資料においてもかなり具体的なデータがありますが、文化的な側面は、観光や経済的な側面と違って数字に出てきにくいいため、日々芸術祭に関わっておられる方として率直なご意見をお聞きしたい次第です。

【齋藤氏】 僕個人が思っているのは、先ほど北川さんもおっしゃっていましたが、違うところに行って、全然違う文化圏の人がそこを体験するというのが文化。僕もそれが一番効果が高いと思います。ただ、それは人から聞いたものとか、最近だとインスタグラムを見たからそれが理解できるかというところではなくて、どうしても僕は時間が掛かるものだと思っていて、我々がイベントをやるときに招致する海外のアーティストの方々とかも、物すごいやっぱり、ああ、日本のこういう場所はこの食べ物があるんだとか、こういう環境があるんだとか、そういうことに驚いていらっしゃるんですけども、おっしゃるとおり、なかなかそれというのは数値化されなくて、余り評価されないんです。僕が先ほど思っているのも、先ほどの質問もそうなんですけれども、じゃあ国がやる意味は何かというと、僕は国はやっぱり制度を作るところが一番やるべきかなと。やっていたかと思うんですけども、僕の場合は感覚でいうと、ボトムネックになるのはどうしても地方行政とかそれこそ窪さんみたいに御理解が高い方がいっぱいいらっしゃるわけではないので、どうしてもなぜこれをここでやらなきゃいけないのか。なぜこれにこれだけの

お金が掛かるのかみたいなことを言われることがすごく多いんです。僕は何か個人的に考えているのは、もう行政の立ち位置というのは、この指止まれの指を作るんじゃなくて、指に止まる人だと思っていて、これはすごくいい意味で、そういう制度を作っていたら、こういうアイデアがあるのであれば、それにじゃあ止まって、一緒にそれをもう少し海外に発信していくことを作ろうとか、若しくはこれをもう少し拡大するためにじゃあ特区の何か特例措置を使っていこうとかということが僕はあると思うんですけども、先ほどのまた質問に戻りますと、そういう何か地道なことをそれこそ僕たちは10年も20年も続けていないので、ただ越後妻有トリエンナーレとか見させていただいていると、僕がさっきすごく驚いたのが、僕も作品を創らせていただいたのが2003年で、そのときこへび隊が、今も忘れない、23人だったんです。全員ほぼ女子の日本人だったのが、海外から来られている、海外からのサポーターも半分ぐらいいらっしゃるとか、あとは先ほども海外の国が援助しながらもそういう建物を造ってやっていらっしゃるというのは、明らかに僕は文化的な価値になっているのかなと思うんです。ただ、僕のいつも思っているのが、じゃあ文化どうなりました？ という答えをすぐ求められることが多くて、そんなにすぐに文化なんかできるわけなくて、だから比較的、僕が思っているのは、やっぱり時間を掛けて文化というのは創っていかなきゃいけないので、その1人1人来てくれたアーティストの方、若しくはそれで来日されて見てくれる方々をしっかりとそこの地域なりよさを持って帰ってもらって、それで違う人たちにまた来ていただくことを繰り返さないと、何も始まらないのかなという感じは思っています。答えになっているか分からないですけども。

【山谷課長】 ありがとうございました。

【堀田主査】 外務省文化交流・海外広報課の堀田と申します。その関連で、窪様に質問させていただければと思います。瀬戸内アジアフォーラムという海外の方との交流の枠組みについて、2016年に既に実施され、2019年も引き続き実施される旨、御説明がありました。先ほど文化施策については短期間では効果は測れないという話もありましたが、行政の立場として、2016年及びそれ以前のアジアフォーラムについてもどのような成果を上げたか認識されているか、また、海外から人を呼んでその後どのようなフォローアップをされているかという点について御説明いただければと思います。

【窪氏】 御紹介したこの瀬戸内アジアフォーラムにつきましては、実は2010年の最初からこういう海外の方の関係者が集まったのフォーラム的なものはございました。そういう中で2016のときに、これは当初、開幕当時は予定していなかった規模で海外からいろいろ

ろ問い合わせとか視察とか熱い視線をいろいろ感じる中で、一つ秋の最終に近いところになるんですけども、大きなシンポジウムとセミナーというのを1週間掛けて、それから現地視察も組み込んでやってみたらどうかということで企画しましたところ、すごくやっぱり応募も多ございました。これにつきましては、外務省さんにも後援を頂いて、させていただいたところですよ。

そのフォーラム自体はすごく成功したと思っておるんですけども、御指摘のようにこれをやはり地元行政としては地元とそのノウハウでありますとか、いろいろな地元の大学とか、そういう美術館関係者などに定着していくというのがもっとできればよかったかなとは思っております、今後も同じようにやっていくと思いますので、課題になってくるかなと思っているところですよ。

【北川氏】 先ほど齋藤さんが言われたこととも関係するんですが、つまり日本の文化庁か外務省か分かりませんが、例えばパリの文化会館がありますね。はっきり言って全然フランスにいる人たちとコミュニケーションをされているわけではない。つまりフランスの文化とかそういう偉い人たちのコミュニケーションであって、フランスの社会にあれば全く関わりがない世界です。それは皆さんも御存じのとおり。それは同じように、アジアのいろいろな国も日本に来るときに、それぞれの何かいろいろなフェアとか何かやっています、その場限りの省庁の担当者なり何かとやっているということになっていて、それが齋藤さんの話となぜ関わるかという、日本へ来てどこへ行ったらいいか、本当に分からないんです。だからフランスだと、ポンピドーセンターの辺りに行ってうろうろすれば大体会えるとか。いや、本当にそうなわけですよ。誰がどうしているとかと分かる。日本の今、それを一番果たしているのは、BankARTです、横浜の。あそこは限られているけれども、一応いろいろな動きが分かる。全く日本の場合は、つまりそういったみんないろいろな人たちが来て、ワイン飲んでタバコ吸ってうろうろしているという場所は国の施設のどこにもないです。とにかくプラットフォームが何も無い。だから当然カレンダーもないし、何も無い。これは本当に困っている。それでしようがないので、交流基金さんにも声を掛けて、もちろんBankARTとかいろいろ地域で頑張っているところに声を掛けて、アジアフォーラムをやり始めた。とにかく集める場所がないよということで、それが割とうまくやって、例えば今回の大地の芸術祭はツアー型芸術祭といわれていますが、すごいんですよ。来て、大地の芸術祭に何日かいて、瀬戸芸に行ったり、東京のファーレ立川に行ったり、代官山に行ったりしながら、要するに研修型、セミナー型。これは政財のかなりエ

ースたちが来ている。そういう何か動きがある、あるいは継続するそういったものと日本の何かが本当に何か集まる場所とかプラットフォームが本当はないですね。例えばここにあるか、ここなのか、新美術館がそうなのか、分かりません。ぐでぐでいれるという場所が本当はないですよ、そこへ行くと情報がいろいろ入ると。これは僕はやっぱり。だから瀬戸芸でもいろいろな作品はあるけれども、作品を見て回る人はいいんだけれども、やっぱりプラットフォームがないと、本当に地域に何も残らないです、何かやっているだけで。

先ほどの中でいえば、2016年はタイのいろいろな人たちが来て、タイファクトリーというのを辺り一帯でやっているわけです。2013年はベンガル島というのを造って、島じゃないですけど広場に。そこにバングラデシュのいろいろな人たちが来ていろいろやっていて、何かやっているとか、そういうようなことを何となく点とか何かじゃなくて面で、しかもつながるような長期的な観点でいろいろつながっていかないとまずい。学者の中ではわずかに研究を通してつながっているのはもちろんあるけれども、本当に文化的な活動をしている人たちの中でそれをセンタリングするものは、日本の場合、全く欠如しています。ほとんど信じられないぐらいだめだと思っています。

【堀田主査】 ありがとうございます。

更に1点関連する質問ですが、この瀬戸内アジアフォーラムに招待している各国からの参加者について、招待する際の基準はあったのでしょうか。

【北川氏】 知っている人みんなに声を掛けているというだけです。

ここでまた文句言いたくなるのは、国がやると、本当にオーソライズされた、日本でいうと芸術院会員みたいな人で線を引くから、そんなの文化のアクチュアルな場所は関係ないですからね。本当に若い一番元気なそういう連中たちが来るの、たまにはやっているけれども、大体、だからいろいろな意味での審査員も、元気なところは違うけれども、やっぱり偉い人たちが審査員やるから、どこでも同じのが選ばれるんですよ。本当に何か現実の動きで、これだけの多くの人が芸術祭とかいろいろなどに行っているのに。だから去年変わったんだと思うけれども、芸術文化基本法が余りにも関係ないというか。でも、大分変わってきたと思いますね、10年前と。

【齋藤氏】 我々なんか、今のお話に続くと、メディア表現のところも、結局僕なんかの分野はほとんど知られていないので、ただ文化庁さんがメディア芸術祭をやられていて、多分、ある程度知っていると思うんですけども、誰が新人でとか、新人賞もありますし、

功労賞もありますし、なんですけれども、僕なんかのところもほとんど、今までは国が選ぶ人には僕たちはなれない、若しくは若手はそんな中には選ばれるわけがないと思ってやっていたところが結構多くて、それはなぜかという、海外だとというのもあるんですが、熱心にアーカイブとかされているところ、例えばフランスとかだと、前もこれを別のところで話しましたがけれども、例えばある一定の動員人数を超えている映画のオリジナルのフィルムを残していこうみたいなことを当たり前に行っているんですけれども、日本では全然やっていなくて、前にとあるところでゲーム展というのが開催されていたのですが、僕なんか関わっていないんですけれども、びっくりしたのは、僕なんかは子供のときに遊んでいたゲームセンターのゲームがほとんど廃棄されてないんです。結局そこまで若手も含めて目が届いていないなというところが僕はすごくあって、今、お話があったとおり、メディア芸術のところだと、ぶっちゃけ言うと、僕たちの世代が多分邪魔をしているんですね、若手の。結局、今が下からぼんぼん出ているんですけれども、僕なんかは要はそのフィールドというか、その作品というか、機会を取っちゃっている感じもあるかもで、若い子たちにはなかなか機会が与えられないので、我々自体がそれを作っていくべきでもある。だから国側に付いて逆に言うと僕が応札できない立場でやっていると、そういう子たちがもっとどんどん出てくるんじゃないかみたいな方法を取ったりもしているんですけれども、是非それは若手をちゃんと発掘する機会としてそれは皆さんがやられている芸術祭を支援されていたり、メディア芸術祭だったらメ芸とかの中でもしっかりそれを見極め、その後育てていくこともちゃんとやると、ちゃんとした文化になっていくのではないのかなと思いました。

【堀田主査】 ありがとうございます。

【山谷課長】 北川先生がおっしゃられた若い芸術家なんかを含めて、集まれる場所、いられる場所というのは、たまり場機能と呼んでいいのか分からないですけれども、恐らく新しい文化とか芸術というのが生まれる場として、若手の人たちが、言ってみればたまれるような場所というのは、それなりに機能というのは重要な役割を果たし得るところがあって、それは公的資金でやると、またそれはそれでまた批判もあり得るので、どこまでできるかというのは議論はあるんですけれども、やっぱり新しい文化とか芸術が生まれる観点からはそういうふうに若手の将来を担う文化人、芸術家を気軽にたまってお互いにインターアクトできるような場が必要というか、そういうのが重要な役割を果たし得ると思うんですが、御覧になって、海外でそういう場というのは何か参考になるような場所があ

るのか。北川先生が言われたパリの日本文化会館は全然そうはなっていないと。確かに余りたまっている雰囲気はないんですけども、どこか何か参考になるような場所とかそういうのに心当たりがあれば、こんなところがどこどこにあって、若手の芸術家が集まって、自由闊達にいろいろお互い高め合って切磋琢磨しているよとか、もっと気軽な雰囲気の中で、いろいろインスピレーションをお互い刺激し合っているよとか、そういったところを何か心当たりがあれば教えていただきたいなと思うんですけども。

【齋藤氏】　メディア表現というか、メディア表現だけではなくて、先ほども言いましたとおり、メディア表現というのはビジネスにもなるし、いろいろなセクターに対しても仕事というか、手をつないでいるような状態なんですけれども、そういう意味で僕が最近、ずっと注目しており、これも僕個人の意見ですが、アルスエレクトロニカセンターがやられているように、メディアアートの次元というのがもちろんアートだけ創るというのもそうなんですけれども、それがどれだけ社会に関与できるか、若しくは社会をどれだけよくできるかということに関与しなきゃいけないなと思っていて、そういう意味で、もう少し広く影響力を持っているメディアセンターがブリストルのウォーターシェッドというところがありまして、それは老舗で1985年から始まっているんですけども、もともと町の映画館で行政がやっていたところなんですけど、そこをプライベートセクターに変えて、今は自分たちで収益も出しながら、それはカフェを運営していたりレストランを運営しながら、若手のインキュベーションをやっているシアワードもやっているし、ブリストル大学とかあとBBCのブロードキャストステーションとか、日本だとNECさんがブリストル市を介して結構いろいろ支援をされていますけれども、というところはあります。

何はともあれ、僕がそこがいいなと思ったのは、別に場所ではなくて、比較的人だと思っただけなんです。そこのディレクターがクレアという女性なんですけれども、その人がいるからこそ、僕はその場所が居心地のいい場所になって、日本からも何人か、それこそ研修で行ったりもしていますけれども、みんなもう感化されて帰ってくるような場所なので、別にたまり場を作ればいいというわけでは。もちろん先ほどの御意見もそうだと思うんですけども、やっぱりそこで何を。結局、僕なんかも、作品を創っていてもそれで美術館でやるためだけでは創ってなくて、どっちかというとか何か課題があるものに対して、例えば地域をもっと盛り上げようとか、ここの場所は杉が有名だからそれを使って何か作品を創れないかということ結構求めているので、そういうところをつないでくれる人、若しくは場所、若しくはプラットフォームというのがあるといいのではないのかなと思いました。

そういう意味で僕の中で頭に浮かんだのは、さっきのウォーターシェッドというところですよ。

【山谷課長】 ありがとうございます。

【英課長】 窪さんに教えていただきたいんですけども、香川県が地方部でいうとインバウンドの伸び率が一番だとか高松でホテル投資ラッシュが起きているというのは、私も観光庁なので承知していたのですが、島に移住する方が増えているというのは知りませんでした。この方たちというのは職業というか何を生業にして移住されているのかはお分かりでしょうか。

【窪氏】 男木島の例を御紹介させていただきましたけれども、最初の頃に初期に移住されて中心的役割を果たされているのは男木島出身の男性で、大阪でウェブ関係の事業をされていたんですけども、瀬戸芸の関係のウェブサイトに関わったのがきっかけで、自分たちのふるさとに戻ってみると、もう過疎高齢化で、これは島はなくなってしまうんじゃないかと。けれども、瀬戸芸ということで、みんながこれだけ来るのであれば、やっぱり可能性があるんじゃないかということで、家族でここに戻ってこられた。その方のネットワークがすごいというのがまず1つあると思います。ウェブ関係、いろいろネットワークのある方ですので、その人の御縁で同じく同じウェブの仕事の方が海外から来たりとか、あとは瀬戸内国際芸術祭にボランティアに関わった縁でずっと島に残られた人とか、主には、そのウェブ関係の方は通信環境があれば島でもビジネスはできる。その人は社長をしているんですけども、大容量のデータの送信のときには高松市内へちょっと船で行ければできるし、あとは島でも十分やっていけるということでされています。あと、資料にも書いておりますけれども、レストランをされたり、美容室の人であったり、それから地域おこし協力隊として登録をしてお給料を頂きながら、活動する人とかあるいは漁師の見習いをしたりとかいろいろなケースがあります。ただ、やっぱり一番高松市内までフェリーで40分の距離ですので、お勤めというとなかなか難しいかなと思います。

ただ、ここは本当に49人と資料に載せていますけれども、当然、ここ数年の間に戻ったという人も中にはあるんですけども、その自治会長さんの話によると、43人まではまだ残っていらっしゃると。ですから、49人移住してきて今も定住しているのは43人いらっしゃるといことのように。さらに今、3家族の方が移住を検討して、空き家を紹介したりやっているとことでしたし、あと、そういう若い家族が来ると、去年は3人の赤ちゃんができて、もう何十年ぶりだったらしいんですけども、ちょっとしたベビーラッシュで、今年

も1人生まれると。市の方も保育士さんを島に派遣したりしているんですけども、1人が見れる何か定員みたいなものがあるらしくて、待機児童ができそうだというのでちょっと心配したりというようなすごいことが実は起こっております。

【英課長】 ありがとうございます。

【三牧課長】 窪さんのお話の中に人材育成の話があったと思うんですけども、そういう意味で、経産省もそうですが総務省さんとか地域の人材育成というのはもう何年間もずっと結構やってきているところがあって、そういう意味で窪さんの現場に近い観点で、昔に比べたらそういう人材というのは少しずつ増えているのか、いや、むしろやっぱり東京とか都市部にどんどん取られていなくなっているのか。そうしたときに、結局どういうところにやっぱり留意して人材育成をしなきゃいけないのかとか、今回取り組まれる取組の中でこういうところを重点的に。例えば人材とかも多分全体のブランディングをするようなクリエイターみたいな方々と、あとはこういうイベントをやるときに行政とか企業とかやりとりするようなどちらかというマネジメントを見るような方とか、特にやっぱりこういうところは弱いとか、そういうちょっと人材育成について、我々も今後また考えないといけない何か御示唆があれば教えていただければと思います。

【窪氏】 瀬戸内国際芸術祭の手法、スキームと北川総合ディレクターの先進的な発想やお人柄ですごく全国、海外からもたくさん人が集まってきてくださるところがあって、瀬戸内国際芸術祭の大きな力になっているのではないかと考えているんです。ボランティアさんにしてもそうですし。ただ、それを地元の人たちが一緒になって芸術祭を運営したり、地域の活性化につなげていくということが必要なんですが、瀬戸芸を始めた頃はまだまだ元気だった方が、10年もたつとやっぱりリタイヤするような年齢になったり、じゃあ次の人誰かできるのかといったときに、なかなかそれがすぐには見つからなかったりするわけです。そういう中で、やっぱりこれからも続けていくためには人材の育成とか、確保が鍵だということで、瀬戸内フラム塾を始めたわけです。それは地元の人じゃなくて、域外からもどんどん来てくださということでやりました。それで、北川ディレクターのいろいろな考え方を学んで、こちら瀬戸芸の運営を手伝っていただく。瀬戸芸の間、頑張ってもらって、できれば残ってほしいというのがもくろみとしてあります。ただ、残らなくてもまた瀬戸内以外のところでどんどん活躍して、また瀬戸内の応援団になってくれたらいいなというのも思っております。そういう意味では地元の後継者を育てるという意味と、一つは瀬戸内だけでなく全国的に活躍する人が育ってくればと両方あるかなと

思っております。

特徴として、驚いていますのは、海外から結構応募もございまして、すごく熱心で、塾も本当に年、1日、2日の講義だったり実習のために、自分のお金でわざわざ瀬戸内まで来てくださって、なおかつ講義料も頂戴しているわけなんですけれども、そういう中で本当に皆さん熱心に集まってくれているなというところで、今後に期待しているところです。

【三牧課長】 これは基本的に週末とかそういうところを使って。

【窪氏】 そうです。今年の初めから大体土日を使って、週末を使って、月1回、2か月に一度とかです。今年の夏は瀬戸内とか越後妻有で実際の芸術祭に関わってもらって、一緒にやりながら学んでいただいたということなんです。今度、瀬戸芸の準備なり本番に向かっては、また本格化していきますので、そこに関わってもらおうと。これからは瀬戸内にできるだけ住んで活動してくれたらありがたいなと思っているところです。

【齋藤氏】 今、お話があった芸術祭を創る人の人材育成のところはすごく僕は大きな日本の中でクリエイティブプロデューサーと僕なんかは言って、多分、もしかしたら分野によって違うかもしれないですけども、お金も分かる、表現も分かる、今のトレンドも分かる、場所性も分かる、行政とも話せるぐらい、若しくはアーティストと話せるような人というのが、今、圧倒的に僕は日本は少ないと思っていて、東京だとアーツカウンシルさんがそういう講座をやったりとかというのがあるんですけども、それも2年か3年掛けてやられていて、ちょうど卒業生が出たぐらいか、分からないですけども、結局その部分、プロデューサーが圧倒的にいないので、単発で全部終わるんです。一気にばーって集まって、何かやろうってわーってやるんですけども、じゃあそのスポンサーさんをどうつなぎ止めていくのか。先ほどおっしゃったみたいにじゃあ3年に1度の祭典、50日や100日の祭典だったらそれ以外の、じゃあ1000日をどう過ごすかがデザインできないですよ。僕なんかメディア表現のところも結構、先ほども申したとおり、地方創生とかいろいろなところでお引き合いいただくので、地方でもやっぱりそういうことに対して、これはインターネットができてからですけども、興味を持ってくれる方が物すごく多くなったんですが、それがシステム化できないというところでは、人材育成の部分。瀬戸内も地域芸術祭の創られ方というのをやっていらっしゃいますが、そういうことは積極的にやっぱり日本の中でもやっていかないと、どんどん小さいものが乱立するだけでまとまっていかないと、結局事業収支のところもすごくお金が一番の問題なので、その部分も解決できないままになってしまうのかなと思っています。

【三牧課長】　そこはやっぱり基本的に今あるイベントに参加してもらって、そこでノウハウを得るのが一番。

【齋藤氏】　多分それもありますし、若しくはイベントに入っちゃうと、もう結構現実だけ見て、幻滅して終了するというのが比較的多いのかなと思います。だから僕が思ったのは、とあるメディア系、現代美術に入っているような芸術祭が事業収支をまねした場所自体が間違っていて、両方ともうまくいかないというパターンが結構あって、美術界から見ると、この事業収支をケーススタディを使って大丈夫なのかなというところがあるので、もしかしたら、もちろん引いた目で、じゃあどういような事業計画でやられたか、どういふに地域の方とエンゲージしていったかというのは、それはそれでちょっと現場から引いた目でやりつつ、現場に入って運営に携わってみるとか、そういうことを両方やっていった方が、僕は何か身になっていくのかなという感じはあります。それはそもそも越後妻有で長いことやられているフラムさんとしてはいかがですか。

【北川氏】　最近、文化庁は仕事も多いせいか民間の人を臨時で手伝ってもらっていますね。あれは結構いいなと思っています。現場で結構、動いている人たちが何やってるの？

　　という、仕事はしながらメディア芸術祭なり、文化庁のお手伝いをしているという人が割といて、結構、元気のいいのに声を掛けていると思っていて、それはいいなと思っ
ています、プロジェクトごとに終わるかもしれない。日本の美術館はやっぱり大分変わってきたとはいえ、学芸員原理主義が通っていて、なかなか面倒ですね。そうすると、皆さんも3年とかに変わるから、時々関係して戻ってこられる場合もあるかもしれないけれども、とにかく文化芸術って人を通してつながっているのに、これはもう致命的な欠点だと思います。例えばフランスでいうと、やっぱり多少は回りながら、同じような人がいっぱい出てきますよ、10年たっても。それが全くいないし、文化庁には専門の研究者はおられるかもしれないけれども、文化一般なんかに関して好きでうろうろしているような人はほとんど見たことないし、はっきり言って面白いと思っていないとこういうのはできないので、僕はまず文化庁の人が1年とか2年、日本あるいは外国の芸術。それは自費じゃないとやっぱり身に付かないかな。いや、本当にそうなので、やっぱり文化芸術の基本というのは身銭を切って手間暇掛ける無駄をやらないとだめだという全て前提があるんだけど、先ほどの質問を聞いていると、どうも結果の方に見ていて、やっぱり何でこの芸術祭で人が来るのかに対して皆さんほとんど興味ないね。それを本当に考えないと、男木島にしてもやっぱり芸術祭が面白くなきゃ人は来ませんよ。そこをやっぱりつかまないと、それに物

すごい分かりやすい話をいろいろとすると、長い教育の成果だと思うけれども、日本の美術はみんな分かる、分からないで答えるでしょう。音楽は好き嫌いでみんな言いますよ。こんなベースの中で分かる、分からないってやってきた文化芸術のいろはもないもんだと僕は思っています。だからまず全員が好き嫌いで物を言える中で、そこで公平さをどう担保するかというのはあるかもしれないけれども、やっぱり好き嫌いがなくて文化についてはやっぱり恐らく全く群盲象をなでることしかできないと思うね。それは僕がこの間、数十年、多少のことを思いながら、やっぱり構造的な問題だと僕は思います。本当にそれは県庁とか市役所行っても、割とそういう傾向があるけれども、それでもまだ狭いから割と回ったりして、3年おきにまた人が来たりしてとかあるけれども、国の場合、ほぼないですね。何かそういう現場性のある人たちがたくさんいれば、代わっても継続性が出ているけれども、まあ見たことないな、余り。それは不思議だなと思いますけれどもね。

【清水課長】 ありがとうございます。

齋藤さんにお伺いしたいんですけども、メディア表現、メディアアートの世界で先ほど、主体がたくさんいて、拠点を作ろうとしている動きもたくさんあるけれども、乱立ぎみで横串が刺されていないと。一方で今回のこの国際文化交流祭典実施推進法という法律は大きく分けて2つのことを言っていて、大規模祭典、国を代表するような、ないしはフラッグシップ的なものを何とか創れないかと。それを通じて、国際交流というものしっかりとやっていけないかということと、それから地域の祭典。今、やっぱり地域各地で頑張っておられる祭典というものをしっかりと盛り上げて、ベースをしっかり創っていくと。前者の大規模祭典というものを考える際に、参考資料に付けているものがそうなんですけれども、新規に創設、又は既存の祭典のレベルアップということになっているんですが、その例えばメディアアートにある種、限って、こうした大規模祭典を考える際に、今の現状からすれば新しく何か大きな動きの中で創っていく、フラッグシップ的なものを創っていくという努力をすべきなのか、それとも既存の祭典がある種、競い合う中で、何か共創しながら、またないしは淘汰されながらフラッグシップの地位を獲得していくプロセスを支援をしていくべきなのか、いやいや、もう乱立は仕方がないと。ある種、それを前提とした上で、先ほどおっしゃっておられたようなカレンダーの中に1つ何か大きく載るような全員が入ってこれるようなイベントみたいなものを創っていくべきなのか。どうすれば我々も行政に課された課題、法律によって課された課題として大規模祭典をどう創っていくかないしはそういうものをどういう形で世界にアピールしていくか。メディアアート、

メディア芸術の世界でどういうアプローチがあるかということを少し伺えればと思います。

【齋藤氏】 僕がずっと思っているのが、メディア芸術祭でこれだけ海外からも応募があるのに、結局メディア芸術祭というので最終的に受賞展をやるじゃないですか。あれで終了するじゃないですか。もちろん巡回展で国内だけじゃなくて海外に行ったりとかというのもやっていらっしゃるんですけども、これだけメディアアーティスト、うちも含めて、いろいろなところともう既に文化庁さんはコネクションがあるのであれば、あれのスピンオフで大規模なイベントをやったらいいのになとは思っていたんです。要はもう事務局としてももう既にコンタクトがあるわけで、ただ場所が美術館の中でやっているというのがメディア表現としてはないなと思っていて、もっと町を使うとか、それこそ地方を使うとか、国民文化祭みたいにそういうのを市町村を回るとかみたいな感じで、もっと大規模でやると、僕は文化庁さんが既に持っているリソースとノウハウと事務局の機能を使っていけるのではないかなと思っています。

周りに乱立している人たちは比較的横のつながりがあるものと、あとはちょっとメディアアートの業界だと、おまえのところはメディアアートじゃないとか、いや、これはエンターテインメントだろうみたいな、ちょっと別にいがみ合いではなくて、いやいや、僕たちそもそも種類が違うんでという人もいますので、僕はことメディア表現に関しては、もしもメディア芸術で何か大きな祭典をやったときに、別にその周りで同時開催で勝手に賛同としてやっているものに関しては、僕は全然、許容すべきなんじゃないかと。そういう先ほど言ったカレンダーを、じゃあ3月なり4月にならなれば、日本の中でメディア表現があっちだこっちだできています。その中心もあるというものができると僕はいいのではないかなと思ったのと、それを実施するのに僕がよさそうだなと思っているのが、やっぱり2020年のオリンピックでやるべきだなと僕は思っていて、結局、ずっときっかけを失うと皆さん、僕なんかもそうですけれども、そういう上からのお達しに余り従わない人たちじゃないですか。だから1個そういう例えばオリンピックとかで横につながると僕なんかも集客でお互いにシェアできるねとか、若しくは違うところで創った作品をここに持っていくと、総合的にいいコラボレーションができるねみたいなことができそうな気がするんです。なので、まあメディア芸術に関していうと、メディア表現もあるし、アートもあるし、エンターテインメントもあるし、もちろん漫画とかそういう創作もあるので、そういうのをまとめてしまうというのは僕はあるような気がしています。

【事務局】 ありがとうございます。

時間が参りましたので、本日の会議は以上とさせていただきますと思います。

北川様，窪様，齋藤様，本日はお忙しい中ありがとうございました。

— 了 —